

「私と科研」



東京芸術大学 特任教授／山梨県立美術館長／日本学士院会員 **青柳 正規**

西洋文化を研究するとき、研究対象の現地を留学や調査旅行で実見することは研究を左右する重要な要件である。私の場合は24歳のときイタリアに留学し、ローマ大学でジョヴァンニ・ベカッティ教授の指導を受けた。3年が経ち帰国がせまったころ、教授は、ギリシア・ローマ考古学の専門図書館がない日本で研究を続けるために二つのことを指摘してくださった。一つは、狭い範囲でもよいから自分が専門とする分野の新しい研究に関する書評を欧米の学術雑誌に寄稿することである。その蓄積で、ある程度学界の動向に遅れることなく自分の研究を継続できるのではないか。もう一点は、小規模でよいから実地調査を根気よく続け、現場で得た一次資料を欧米で発表すれば、さまざまな関連情報を逆に得ることができ、日本にいても欧米の第一線の研究サークルに参画し続けることが可能であろう、ということだった。

帰国当初、書評にとりくんでみましたが、ローマで通っていた専門図書館では600タイトル以上の学術雑誌を利用できたのに対して、日本では30タイトルにもならず、第二の現地調査に重点をおいて約40年間の研究生活を送ることになった。

留学中、しばしばポンペイ遺跡に足を運んでいたのが遺跡の責任者や考古局総監とも顔見知りになっていた。東京大学文学部として発掘調査の申請をしたが、ギリシア・ローマ考古学の世界では全く知られていない大学だったにもかかわらず、私がチーフということで許可はすぐにおりた。1974年夏の約5ヶ月に及ぶ第一次調査では、私を含めた3名という最小限のチームで調査費用も財団等の研究助成金で賄った。4次にわたる調査の報告書『エウローパの舟の家』が、ポンペイ研究の専門誌の書評にとりあげられ一定の評価を受けたことで、ようやく欧米のギリシア・ローマ考古学界に受け入れられた。

しかし、民間の研究助成金に頼っているには限界があることを痛感した。さいわい東京大学では当時海外調査が盛んに行われていたので今でいうファンドレイジングの方法を聞き出すことができた。関係者が異口同音に言うのは科研がもっとも効率がよいということである。その助言に従って、爾来、科研に頼ることになり、発掘調査も継続性をもって進めることができるようになった。1979年から始めたシチリア南海岸でのローマ時代別荘遺跡の発掘調査は7年間を要した。それまでのシチリア考古学はギリシア時代、もしくはローマ時

代のギリシア文化が中心だったが、われわれの調査研究によってローマ文化そのものに関心が広がるようになったと考えている。

シチリアでの調査を終える頃から、次はイタリア中部での発掘調査をしたいと考えるようになった。イタリア半島中部以南全体を研究対象とし、その比較研究を発掘調査に基づいて行う考古学者は当時皆無だったからである。候補地を検討した結果、ローマの北120キロほどのタルクィニアという町の郊外、ティレニア海沿岸にあるローマ時代の海浜別荘を選ぶことができた。その遺跡は古代文献にクインティアーナと記されている場所の可能性が高く、そのことを証明できる可能性もあった。シチリアでの発掘調査で作上げた研究チームをひとまわり拡大し、常時20人を超えるメンバーと寝起きを共にし、現地の作業員10人近くと3ヶ月以上にわたる発掘調査を1992年から10年以上にわたって続けた。

現在でも遺物整理などを細々と続けているが、この調査でも、エトルリア文化の中心地だったためにローマ文化研究が停滞していたタルクィニア周辺地域に、ローマ文化研究の重要性を広める契機をつくったと考えている。

発掘調査と並行して開始したのが1999年からの特別推進研究(COE)「象形文化の継承と創成に関する研究」である。ポンペイ壁画の画像による集大成を編纂することが目的の一つで、同遺跡の西端地域全体の壁画群をデータベースに収集し、資料集として出版することができた。この壁画集大成はポンペイ壁画研究の基本書の一つになっている。また、2004年からは特定領域研究「火山噴火罹災地の文化・自然環境復元」という研究を開始し、その一環としてのソム・ヴェスヴィアーナでのローマ時代別荘遺跡の発掘調査は現在でも継続している。すでに15シーズンを超える調査を継続し、古代末期の地中海交易が、通説とは異なり、かなり安定的に行われていた状況を証明しつつある。この調査研究の中から、日本における災害考古学の重要性を改めて認識することになったので、是非ともこの分野を定着させたいと考えている。

以上のように私の研究生活において科研は研究のプラットフォームであり、推進力の源泉であった。発掘調査という研究方法を軸にしてきたので当然とも言えるが、科研の重要性を若い人文学研究者に伝えるだけでなくフィールド・サイエンスの重要性を訴えていきたいと考えている。